

偶然性と連帯

CONTINGENCY AND SOLIDARITY

山縣 弘子

YAMAGATA hiroko

Key words:偶然性, 連帯, 会話

目的

どのような病いであっても、苦しいという思いは、共通している。それが、一生ついてまわる慢性疾患であれば、なおさら深く感じられるものであろう。感情面が、揺るがされるような葛藤から解放されたいと願うことは、病いととも生きる

人たちにとって当然の思いではなからうか。

本論文では、病いととも生きる過程や状態へ焦点を当てることにより、偶然性や連帯の元にある意味体系を思索し直すことを目的とする。

方法

S カイ・トゥームズは、病気の体験に関する考察から次の点を明らかにしている。

「病気の体験は、世界の内にある、独特の存在様式を表象するが、それは、全体性と身体性の統合性の喪失、確実性の喪失とそれに伴う不安や恐怖、コントロールの喪失、様々な方法で行動する自由の喪失、今まで慣れ親しんだ世界の喪失によって、典型的に特徴づけられる存在様式である。(1)」

これら各々について理解するには、病いを抱える身体に対峙する必要があるといえよう。

研究方法としては、再生不良性貧血の患者である、私自身の体験と意思の記述から、病いととも生活することの「現実」を捉え、説明するよう努めた。以下これらを論じていくことで、病いと生きる状況を理解するための手がかりを、探究したいと考えている。

結果

病いと生きることは、病いを抱えた身体が自分のものではないかのように、錯覚するほどの違和感を感じさせるといえよう。それにも拘わらず、その現実に身を投じて、受け入れるしかないのである。

このような、身体の外感を感じて生きる人たちに、相互理解をもって寄り添うことができるのは、病いの経験を抱えた仲間であろう。気持ちを共有することが可能となる場所を得られることは、苦しみへ対処できる示唆を与えてくれるのである。

例えば患者の会へ足を運ぶことは、病いを抱えた人たちと偶然の遭遇をもたらす、かけがえのない喜びが見いだせるのである。そこには、お互いを隔てるような壁はなく、

仲間にはしか見せない姿が存在している。しかし、たえずそばに寄り添っているわけではないのである。その関係性は、直線でも並行でもなく、過酷な現実が生み出す孤独感や厳しさが、見え隠れするものである。

その中で語られる経験に耳を傾けると、様々な物語が、自分を映し出す鏡であることに気づかされるのである。そして、自分にとって、病いとは何であるのかという問いかけに、向かい合うことができるようになるのである。また、会話の継続の中で、仲間が被る苦痛に気づき、残酷さを分かち持つことで、病いに対する思考を新しい発想へと転換させることもできるのである。

さらに、自分とは違う生き方を見ることにもなる。それは、宇宙の海を航海している船のように、病いに対する弱さを感じさせない姿勢であったり、時には、病いの圧迫感から、多くの物を見失った姿でもある。またある時には、生きるための表象である移植が、うまくいかなかった場合であり、死を媒介することも提示されるのである。

病いととも生きる上では、現実に適応するための営みが必要であろう。それを実行することで、運命を支配する力をもつことができるのである。それは、ある種の安定感へつながるものではなからうか。

考察

連帯は、偶然性を受け入れることによって達成されるといえよう。それは、絶えざる会話の広がりを求めることについての、探究や記録の中に秘められた可能性にほかならないのである。

注

- (1) S カイ トゥームズ.(永見 勇訳)『病いの意味 患者と患者理解のための現象学』日本看護協会出版会, 2001, p. 190.

参考文献

- (1) リチャード・ローティ.(斎藤純一 山岡龍一大川正彦訳)『偶然性・アイロニー・連帯』株式会社 岩波書店, 2009.
- (2) リチャード・ローティ.(富田恭彦訳)『連帯と自由の哲学』株式会社 岩波書店, 2006.